今週のみことば

「最後まで耐え忍ぶ者」

仲森文穏牧師

（マルコの福音書１３章１～１３節）

「わたしの名のために、あなたがたはみなの者に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。」(13)

今日のメッセージ要旨

◎ソロモンが建てたエルサレム神殿はBC586年にバビロン軍に破壊され、その同じ地にバビロン捕囚から帰ってきたゼルバベルがこれを再建、これがいわゆる第２神殿です。以前のものと比べ見劣りがしたようですが、礼拝はどんな場所でもできますね。たとえ入れ物が小さくとも、そこに「霊とまこと」をもって礼拝する人たちがいれば、豊かに礼拝を守ることができます。皆さまが霊に満たされ、活き活きされていることが何より大事なのだと思います。

ヘロデ王はこの第２神殿の修復・拡大工事に、BC20年に着手、AD64年に完成しました（ヘロデはBC4年に死去、工事は継続）。神殿は大理石造りで、外壁や門は金銀の板で覆われ、太陽の光で神殿はまばゆく輝いたそうです。これを見て、弟子たちは「何とみごとな石でしょう。何とすばらしい建物でしょう」と感嘆しました。しかしイエス様は「石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません」と仰いました。神殿の存在意義は人々の罪を動物犠牲で贖う所にあります。イエス様は、十字架でご自分を人々の罪の贖いとしてささげるお積りでした。しかもその犠牲は１回限りで100％の効果がある。ですからイエス様は、十字架の贖いを人々が信じた時には神殿は崩壊する(不要になる)と仰ったのでしょう。

◎さて、今日の箇所のやりとりの要点を２点あげると、まず１点目は「偽キリストに惑わされるな」です。天変地変や戦争がひん発すると、この世の終わりは近いと思ったりしますが、そんな時には救世主を装う者―たとえば国家だったり、まやかしの人物だったりーが出てきがちです。だからイエス様は仰います。そんな時こそにせキリストに惑わされたり、不安に陥ったり、自分を見失ったりしないようにと。これが第１点。

そして第２点目は「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」ということです。時代によって大なり小なりの迫害はあるものですが、初代教会においてもそうでした。しかし、迫害は福音の前進を阻む力とはなりませんでした。例えば使徒パウロは度々迫害に遭いましたが、迫害さえも前向きに捕らえて、福音を語る機会としました。まさに聖霊の働きというしかありません。彼がローマ行きを志願したのも、裁判で命乞いをするためではなく、ローマの信仰の友を励まし、またローマの人々に福音を伝えたかったからです。このように、迫害をも伝道の機会とし、最後まで耐え忍ぶ人は救われる。聖霊が共にいてくださるから、というのが第２点。

◎「心をまどわされるな」という御言葉と「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」という御言葉を心にとどめましょう。この世はいつか終わりが来るでしょう。核兵器だらけで、それを脅しに使う者も居たりする世の中ですから、一層そういう気がします。しかし、たとえ世の終わりが来たとしても、終わるのは人間の罪の世界であって、そこから新しく神による新天新地が始まる、救いはこの世限りのものではない、と信じることが肝要です。　「あがない主」であるイエス様を見上げ、足を地に着けて日々の課題に取り組むことが、私たちに期待されている終末論的生き方であろうと信じるものであります。　祈り。